

第9分科会

若手研究者からみた「大学改革」

コーディネーター：水田 大紀 氏（佛教大学 歴史学部 准教授）

報告者：崎山 直樹 氏（千葉大学 国際教養学部 講師）

成瀬 尚志 氏（大阪成蹊大学 マネジメント学部 准教授）

古川 雄嗣 氏（北海道教育大学旭川校 准教授）

分科会概要：

1990年代以降、文部科学省が主導する「大学改革」が急速に進められてきた。現在も変化の途上にある大学の教育現場において、「これから大学はどうなっていくのか」を最も危機感を持って受け止めざるを得ないのが、いわゆる「若手」と呼ばれる30-40代の大学教員・研究者である。本分科会では、この世代にとって「大学改革」とは何だったのか、より望ましい「大学改革」の方向性とは何かを、これまでの「大学改革」を批判的に検討することを通じて考えたい。そしてそれにより、現在の社会から求められている大学の理念や存在意義についても問いかけていきたい。

開催の目的に即して、本分科会では3名の登壇者による講演が行われる。まず崎山直樹氏は、日本の大学がどう変化していくのかをテーマとし、2018年に公表された中教審答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」に関し、特に「学修者本意の教育への転換」という目標に注目することで、その意義と課題について検討を行う。次に成瀬尚志氏は、多くの大学で取り入れられるようになった地域連携型のProject-Based Learning（課題解決型学習）について報告を行う。現在、地域連携型のPBLでは地域の課題解決が目指されている。しかし、「地域の課題解決」というのは、PBLの課題設定として有効だろうか。そこで成瀬報告では、目標設定としての「課題解決」の有効性について検討し、そのオルタナティブとしての「ソーシャルアクション」の可能性について検討することが目指される。そして古川雄嗣氏の報告では、大学改革を推進するための中心的な方法論となっているPDCAサイクルに関する批判的考察を行う。各大学に義務付けられている現行のPDCAサイクルは、回せば回すほど、研究・教育の内実を痩せ細らせていく。その構造を分析することを通じて、PDCAサイクルが研究・教育の改善に資するための条件を考察する。

以上の講演を通じ、またフロアからの意見も交えた議論を踏まえて、理念や存在意義の問い直しを迫られている現在の大学において、その将来を担うことになる若手研究者からの視点で「大学改革」への問題提起を探っていく。